

# 社会起業から学ぶ持続可能な開発への創発的アプローチ

～新しいシステム観にもとづく問題解決思考の再検討～

56846 大城早苗

## 研究の背景と問題意識

近年、地球規模の温暖化の問題から地域振興の問題まで、行政・市民・企業・NPOなどの垣根を越えて、包括的に取り組もうとする新しい主体間の協働が注目されている。特にその一形態として、グラミン銀行のユヌス博士が2006年にノーベル平和賞を受賞したのを契機に、社会起業（Social Entrepreneur：以下SE）に対する期待が高まっている。SEとは「社会問題に対して事業を通じて解決しようとする」主体であり、社会性、事業性、革新性の3点が要件として挙げられる（谷本 2006）。現実には、事業化するNPOと、社会貢献を行う企業の二つの方向からその存在が知られようになってきている。

一方で、持続可能な開発（Sustainable Development：以下SD）の概念が提唱されてから20年が過ぎ、SDやSustainabilityを使った議論は絶え間がない。その使用の頻度の高さに対して、定義や解釈についてのコンセンサスは得られておらず、一元的な意味ではなく、多様に展開されている。しかし、この概念によって提示された「長期的なビジョンをもとに多様な主体が協働し、有限の資源、容量の中で、多元的な価値創出し、時間、空間を越えた公正について取り組むこと」（第2章）は、まさしく人類最大の挑戦である。このようなSDを実践するアプローチは、対処療法的な問題解決型から、根本を見据えた価値創出型の思考・行動への転換を要請しているが、この実践に対しての知見はあまりに少ない。

## 研究の目的

このようなSDに必要な「共有されたビジョン下の多主体の協働」を実現するために、複雑化する社会を複雑なままに捉える「新しいシステム観」に基づいて、SEのアプローチから援用可能なモデルを抽出し、さらにSDへのイニシアチブをとる人やコミュニティに応用するために、そのモデルの実践環境を設計し、その有効性を検証することが本論の目的である。

## 研究の対象と手法

具体的なSEの事例として、社会、環境、経済の3つの分野を起点とするSE、すなわち「グラミン銀行」「アサザ・プロジェクト」「サステナブル・コーヒー」の取り組みを取り上げる。それぞれが革新的で従来のアプローチを刷新するものでありながら、そこからSDへの応用を意図したモデル化が行われてこなかったことから、本論の事例として取り上げた。これらの取り組みに対して、筆者は数年をかけて、創始者、関係者、現場の人々と接し、関わりながら調査してきた。そして、新しいシステム観の導入によって浮かびあがるアプローチをモデル化した（第3章）。

さらに抽出したモデルの実践環境づくりについて設計し、実践した。事例としては、筆者が取り組んだ、WSC-SD<sup>1</sup>および

---

<sup>1</sup> World Student Community for Sustainable Development

AGS-UTSC<sup>2</sup>における“SDのための学生活動”の中の2つのサミットを採用し、客観的観察と主観的観察との組み合わせから、モデルのさらなる検証を試みた（第4章）。

## 研究の結果

### I. 創発的アプローチ

3つのSEの事例をもとに、「多様な主体が共有ビジョンのもとに協働し、多面的な価値を生み出す」ためのアプローチを抽出したところ、右図のように構造化される振る舞いが共通して見られた。これを「創発的アプローチ」と呼ぶ。

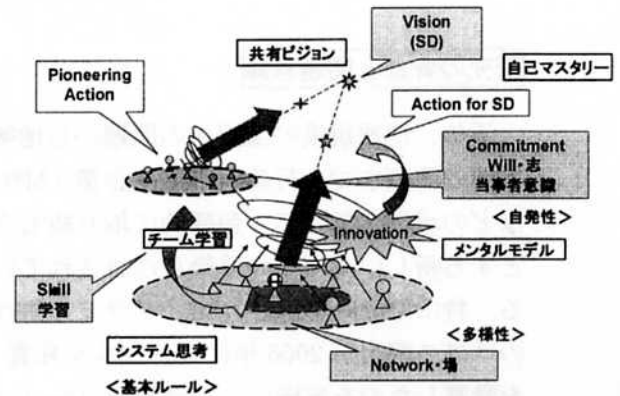
SDに対してイニシアチブをとる人やコミュニティ（SEでいう社会起業家）の「強い当事者意識」「想い」が起点となり、ビジョンが形成され、彼女/彼らの本質的な目的が確固となる（プロセス①）。その目的に対して、あらゆる関係性を洞察する視点から、従来のやり方に囚われずに目的価値を生み出す手段、それ自体が新しい関係性を構築する手段が創出される（プロセス②）。ビジョンに共感する多様な主体が関わり合うことで、社会的場、ネットワークが生まれ、多面的な価値を創造する（プロセス③）。生み出される手段・事業は自己完結せず、派生して自己組織化を繰り返し、相乗して広がっていく（プロセス④）。

### II. 創発的アプローチの実践（創発環境）

筆者がAGS UTSCにおいて主催した、2007年2月の「Japan Youth Summit for Sustainability」と、2007年3月の「Student Summit for Sustainability」という2つのサミットの準備、運営の中で、上記の創発的アプローチを用いた環境づくりに取り組んだ。その実践により、プロセス①から④までを実践し、SDに向けた新たなプロジェクトを作り出すことができた。

<sup>2</sup> Alliance for Global Sustainability, University of Tokyo Student Network

課題としては、人の思考や行動を根本的に変えるような本質的な変化を日常生活にまで反映される段階までは到達できなかった点にある。



## 今後の展望と課題

創発的アプローチは、目的によって価値が明示された上で構造的手段を創出する。それは多面的価値創造型であるため、従来の問題解決型のアプローチに見られる「手段の目的化」が回避され、SDに向けた努力が継続される。

このような創発的アプローチをさらに発展させ、SDおよび今後あらゆる課題に取り組むためには、組織開発論など多分野で研究が進められている「個と全体」「対話」などに関わる新しい知見を導入し、実践コミュニティを拡大していく必要がある。

筆者は、個人の内外に存在する「分断」を融和する対話に注目し、創発的アプローチの理論と実践（ムーブメント名：Imaginearth）を進めていく。

### （参考文献）

- ・ 谷本寛治編著『ソーシャル・エンタープライズ：社会的企業の台頭』中央経済社、2006年
- ・ Senge, Peter M. et al. *Presence: Exploring Profound Change in People, Organizations, and Society*, Currency 2005